

2009 年度立命館大学入学式

2009.4.1

立命館大学 学長 川口清史

本日ここに、7,672名の学部新入生、1,355名の大学院博士課程前期課程、博士課程後期課程、一貫制博士課程、修士課程、専門職学位課程の新入大学院学生を迎えることができました。入学式に当たって、大学、学園を代表してお祝いの式辞を述べます。

新入生諸君！入学おめでとう。大学院生諸君、入学おめでとう。また、新入生諸君をさまざまに支えてこられたご家族の皆様にご心からお祝いを申し上げます。子供が大学に入るといふことは、まだまだ経済的にも精神的にも支援は必要とは言ふものの、やはり子育てのひとつの大きな山を越えるものであります。本当におめでとうございました。また、新入生諸君の中には～名の留学生と～名の社会人の皆さんがいらっしゃいます。みなさんにとってこれからの学業は決して楽なものではないでしょうが、立命館大学は全面的に皆さんを支援いたします。私学立命館にとって、国際化、生涯学習社会の進展の中で留学生、社会人を大学に迎え支援することは大変重要な使命であると考えています。

新入生諸君は今日から108年の歴史と3万6千人の学生を有し、日本を代表する私立大学である立命館大学の一員になりました。立命館大学は、明治2年（1868年）、戦前の日本の最後の元老であった西園寺公望が20歳の折、御所の内部、蛤御門にあった邸宅に開いた家塾「立命館」をその前身とします。西園寺公望は明治維新から第2次大戦の敗戦直前まで、首相を2度務め、立憲政治を日本に定着させた国際的視野を持った稀有の政治家として日本の近代史に大きな足跡を残した人物です。

「立命」とは、「天の命を全うする」こと、つまりは「完全に人知の及ばない状況を作り出す」ことを意味します。それはとりもなおさず、人間のできることはすべてやりきる、ということです。ですから、「立命館」とは「天の命を全うするまでに努力をし尽くすところ」となるのです。この言葉は中国古代の思想家孟子から来たものです。孟子の時代はそれ以前の孔子の時代とは違って不安定で荒れた社会であったといわれています。その中で、孟子は人民重視の考え方をしたことで知られています。西園寺が立命館を創設したころはまだ江戸時代以来の朱子学が主流であり、孟子は異端の危険思想と見られていました。旧体制の打破と新しい社会の建設を志す青年貴族西園寺は、あえてその孟子から名前を取ったのです。実際、西園寺の家塾「立命館」は創立後わずか1年足らずで閉鎖命令をうけてしまいます。

私はこの「立命館」という名前に誇りを持ってほしいと思います。先ほど述べたようなその意味の深さはもちろん、青年西園寺の新しい社会建設への燃えるような思いがこの名前には詰まっているのです。創立者中川小十郎によって策定された建学の精神「自由と清

新」は、今述べたような西園寺の旧体制との闘いに思いをはせると、この言葉の重い意味を理解できます。「清新」は英語では innovation です。イノベーションは立命館の創立以来の深く刻まれた歴史的伝統です。このイノベーションを通じて立命館学園は、2 大学、4 つの高校・中学校、1 小学校からなる我が国有数の私立総合学園へと発展しました。こうした発展を可能にしたのは、立命館が私立の学園であることを誇りとし、その特徴を最大限に生かしてきたからです。立命館は一貫して、教学の、研究の、そして大学そのものの革新を続けてきました。そして学問・芸術・文化・スポーツなどに秀でた多様な人材を受け入れ社会に送り出してきました。この多様な人材の交流こそが私立学園の社会的使命であり、優位性であるといえます。こうした変革の文化、気風を、皆さんも立命人の一人としてぜひ我が物にしてください。絶えざる自己の革新への努力こそ、「立命」の名に恥じない生き方なのです。

立命館はこうした歴史的伝統を踏まえて、2006 年『立命館憲章』を策定し、教育と研究と社会貢献についてその使命を明文化しました。『憲章』は短いものではありませんが、よく練られ、考え抜かれた文章です。君たちの学びの指針としてしっかりと読み込んでください。そこでは、立命館における教育の目標を「確かな学力の上に、豊かな個性を花開かせ、正義と倫理を持った地球市民として活躍できる人間の育成に努める」といたしました。

君たちがこれから進んでいく社会は知識基盤社会と呼ばれる高度な知識や技術が要求される社会です。そこでは高度な知識が日々新たに生まれ、また過去のそれらが次々と陳腐化していく社会です。ある意味では大学を卒業してから本当の学びが要求される社会です。働くことと学ぶことが一体となってともに要求されます。大学での学びはまさにそうした学習社会に巣立っていくための基盤づくり、といえます。この基盤が大きく確固としたものであればあるほど社会で大きな優れた仕事につながっていきます。

ですから、今大学で学ぶことで問われているのは、卒業資格として学士の称号を得ることだけではありません。学びの中でどのような力をつけるか、学士というのはどのような力なのか、社会人としてどのような力を持って大学を出て行くのか、大学で身に着けるべき competency が問われています。私がこの 2 月参加した日英学長会議においても、イギリスの諸大学からは「employability」すなわち就業能力について論議されました。

私は社会人、職業人として大学を巣立っていく君たちに、大学でつけるべき学力、力量には 4 つの領域があると考えています。その第 1 は問題を認識する力、論理的な思考力、相手の主張や立場を理解する力、自らの意見を説得する力、といった知的な人間としての基盤的な力量です。第 2 の領域は、情報を手に入れ、整理し、発信するリテラシー能力です。これには言語能力、コンピューターリテラシー、数学・統計学の力が含まれます。第 3 は自然や人間、社会への深い理解とそのあるべき姿・方向についての確信を持つ教養力です。教養力というと、ともすれば細やかな知識と思いがちですがそうではありません。問題はさまざまに起こってくる事象に対する見識を持つことです。見識とは判断力であり、

洞察力であり、かつ自らの尊厳でもあります。見識は物事に対する深い理解と自分自身の生き方を含めた価値観が基礎にあってはじめて生まれるものです。教養とはそうしたものにほかなりません。そして第4が分野ごとの専門的な知識や技術、経験です。ただ、大学の4年ないし6年間で得られた専門知識はその後の専門的職業における基礎であることも留意しておいてください。

君たちはこうした力を大学生生活で自らの学びを通じて身につけていかなければなりません。立命館大学は自ら学ぶ学生諸君を励まし、支え、導いていく仕組みと構えを持った大学です。それは正課のカリキュラムだけではありません。多様な課外プログラム、学生自身の自主的な活動、海外への留学、など、チャレンジする学生を支えるシステムは全国の大学の中でもとりわけ進んでいると、私は自負しています。チャレンジこそ学生の特権です。今の自分にはちょっと距離があると思われる目標に果敢に挑んでください。君たちの若さは、君たち自身が驚くほど急速な成長を可能にしてくれます。そして万一チャレンジがうまくいなくても、再びチャレンジを可能にする条件があります。そして失敗はそれがまた君たちの人間性を深めることにつながっていきます。

ぜひ学生時代に一度は外国の生活を体験してください。2年間留学から短期の調査研究まで、きわめて豊富な海外プログラムと奨学金が用意されています。インターンシップやフィールドワーク、ボランティア活動で積極的に地域や企業に出て行ってください。クラブやサークルで日本一を目指してください。資格取得や、将来につながる能力形成に励んでください。学生時代でしか取り組めないような難解な書物への挑戦してください。読書こそ知性を磨く砥石です。

君たちには、是非とも「正義と倫理をもった地球市民として活躍できる人間」として成長して欲しいと願っています。さまざまな事象に対する見識、判断力を身につけて欲しいと思っています。立命館大学は、そのための仕組みと構えも持っています。

しかし、昨今の状況を見ると、大学生を含む若者のあいだで大麻などの不正薬物使用が広がり、社会問題化しつつあることは、まことに残念な現実として受け止めざるを得ません。日本の若者文化にとって分かれ道にあると思っています。

君たち一人ひとりが不正薬物使用の危険性や違法性を十分に認識し、適切な判断をして欲しいと思います。君たちにおいては、キャンパスに薬物は許さないという文化をつくりだしてください。そして、全国の学生たちの範となり、新しい若者文化のムーブメントを起こしてもらいたいというのが私の想いです。

君たちが大学で学び自己を創り上げていくことは君たち自身の未来を創るだけでなく、日本社会の、さらには地球と人類の未来を創っていくことになります。敗戦直後の解体の危機に瀕した立命館に招かれ、長く総長をお勤めになって今日の発展の基礎を築かれた末川博先生は「未来を信じ、未来に生きる」という言葉を残されました。今日の学びが明日

の未来を創っていくのです。新入生諸君、多くの学生諸君、そして私たち教職員とともに、平和で民主的で、そして持続可能な未来を創る人間になっていこうではありませんか。

入学、おめでとう。

以上を持ちまして、総長としての式辞といたします。